

## 支那事変と近衛文麿内閣

平成16年1月26日・袖ヶ浦公民館

きょうは、昭和十二年七月七日の七夕の夜、北京郊外盧溝橋で発生した発砲事件、結局はこの発砲が支那事変、さらには太平洋戦争へとつながっていくわけですが、その盧溝橋事件を中心に話してみたいと思います。

盧溝橋と云うのは、北京の西側を永定河が流れていますが、そこにかかる全長三百五十メートルの大理石の橋です。金の時代、一一九二年に造られ、欄干百四十個の狛獅子が一つ一つ形が変わっている珍しい橋で、マルコ・ポーロが「東方見聞録」に「世界で一番美しい橋と思う」と紹介したことから、「マルコポーロ・ブリッジ」の名前でも知られています。橋の東側には、十七世紀半ば、明の時代に宛平県城が築かれ、二千人の住民のほか中国第二十九軍の軍隊が駐屯していました。ここから眺める月が素晴らしいと云うので、橋のもとには清の乾隆帝直筆の「盧溝曉月」の石碑が建っており、盧溝橋事件はこの歴史的名所で勃発したのです。

日本陸軍一個中隊百三十五人が夜間演習をしている時、突然銃撃されたのですが、全部で十八発だったと云われています。誰が発砲したのか、計画的な、謀略的なものだったのか、それとも偶発的なものだったのか。真相は六十七年経った今も依然として謎のままですが、いずれにせよこの発砲で死者が出たわけではなく、出先の軍隊の些細なトラブルでした。時の内閣は、国民期待の中で誕生した「若きプリンス」、四十六歳の公爵近衛文麿内閣です。日本政府は不拡大の方針でしたし、現地では間もなく停戦協定も結ばれました。当事者さえ本気になって解決を図ろうとすれば、解決出来ないような事件ではなかったのです。

それがどうして、支那事変にまで発展してしまったのか。日本陸軍の中にもこの発砲事件を口実にして中国北部、華北の権益を広げようとする拡大派がいました。中国側にも、一挙に抗日民族統一戦線結成へ持つていこうとする共産勢力の策動がありました。しかしこの盧溝橋事件が不幸だったのは、ちよつとした行き違いが次々と重なり、それがお互いの不信感を増幅して、ついには八年間にわたる日中全面戦争突入の引き金になってしまったことです。この事件を局地事件で処理していたら、恐らく太平洋戦争はなかったでしょう。盧溝橋の銃声が日本を破滅に導く運命の一発になったのですから、まさに「恨みは深し盧溝橋」でした。

北京南西四キロの豊台には支那駐屯軍歩兵第一連隊の第三大隊が駐屯していましたが、その第八中隊が夜間演習のため盧溝橋に着いたのは七日の夕方でした。中隊長の清水節郎大尉は、何かいやな予感がしたそうです。二十日ほど前に演習し

た時には何もなかったのに、川の水神様を祭った龍王廟付近の堤防に散兵濠が見え、二百人ほどの第二十九軍の兵隊が何やら工事をしています。清水は、部下に中国兵を刺激しないよう注意した後、夜七時半から払暁攻撃のための陣地構築演習に入りました。十時半頃、「仮設敵」と云って、敵軍に想定した部隊に休憩をとらせるため伝令を出したのですが、この伝令を演習部隊の接近と勘違いした仮設敵が、軽機関銃を空砲射撃してしまつたのです。すると突然、堤防の方から数発の実弾が飛んできました。清水は直ちに演習を中止し、集合ラッパを吹かせましたが、今度は鉄橋付近から十数発の実弾射撃を受けたのです。宛平県城の城壁と堤防上に、懐中電灯らしい光が点滅していたと云います。

ここに第一の不幸な偶然が重なりました。伝令に出した二等兵が道に迷つて、行方不明になつたのです。初年兵で、用便中にはぐれたんだと云う説もあります。が、清水大尉は冷静に一発の応射もさせずに、とにかく上官の判断を仰ごうと、豊台の大隊長一木清直少佐に伝令を出しました。ところが一木も、一木から電話報告を受けた北京城内の連隊長牟田口廉也大佐も、この兵隊不明の方を重大事と取つてしまつたのです。牟田口は一木少佐に「現地急行」を命じると共に、第二十九軍に使者を派遣して、兵隊捜索のため宛平県城の立ち入り検査を要求させました。行方不明の兵隊は二十分後には部隊に戻つていたのでありますが、清水大尉の方は眼前の中国軍との緊張に全神経を集中させています。一木少佐と合流してからも、その「兵隊無事」の報告を午前二時過ぎまで忘れてしまつたのです。日本側の立ち入り検査の要求は続き、反発を強めた中国側は頑強に拒否しました。この行方不明事件がなかつたら、立ち入り検査の要求はなかつたでしょうし、その後の交渉がもつれることもなかつたでしょう。

ガダルカナル、インパールの話を聞かれた方は、牟田口、一木の名前ですぐ思い出されることと思います。牟田口は「悲劇のインパール作戦」の軍司令官で、昭和十九年三月、補給というものを全く考えない無茶な作戦でインドに攻め込み、戦死三万、戦傷、戦病者五万人と云う悲惨な犠牲を出しました。一木の方はミッドウエー島攻略に当たる予定だったので、ミッドウエー海戦の大敗で取り止めに待機しているところへ、十七年八月、米軍がガダルカナルに上陸してきました。一木大佐以下九百人余りの一木支隊は急遽ガダルカナルに向かいました。日本が勝つていて、米軍の火力の恐ろしさを知らない頃でしたが、これも無茶としか言い様のない作戦です。理性派と云うよりは、豪将タイプのこの二人が現地責任者だつたことも、盧溝橋事件を大きくする一因になりました。

一木大隊が盧溝橋に布陣を終わりに夜明けを待つていたところ、午前三時二十五分頃また三発ずつ二回撃たれたのです。牟田口は抗議の使者を派遣する時、「あくまで不拡大方針で臨む。向こうの弁解はこじつけであつても聞いてやれ」。こ

う云っていたのですが、二回の射撃にカツとなつたのか、一木の「断乎攻撃すべきだと思ひます」の意見具申に、午前四時二十分「戦闘開始」を命令したのです。日本軍は龍王廟を占領し宛平県城を砲撃しましたが、十一日夜に停戦協定が成立するまで戦死十一人、負傷三十六人、中国側も約百人の死傷者を出しました。牟田口は「事件を最小限に食い止めるには、この際一喝を食らわすことが賢明だと思つた」と云つていますが、発砲で死者が出たわけではなし、交渉中に戦闘命令を出すあたり、あの頃の軍人特有の一撃論、「なあに中国軍は弱い。一撃すれば簡単に参るだろう」。この思い込みがあつたのでしよう。

十七年前に亡くなられた高松宮には、海軍兵学校在学中の大正十年から書き続けた二十冊の「高松宮日記」があります。その中で当時三十二歳、海軍少佐だつた高松宮が、実到的確にこの盧溝橋事件の問題点を指摘しているのです。高松宮がまず第一に望んだのが、日本側の冷静な対応でした。「時局不拡大の方針というそばから、日本の新聞が参謀本部で徹夜しているとか、やれ何のど、上ずつた宣伝をしているのは逆効果になる」。新聞の過剰な反応を心配していますが、例えば八日朝の読売新聞号外は、見出しが「支那軍不法射撃、日本軍も応戦す」。どの新聞ももう第一報の段階から、陸軍の発表のままに中国軍隊の発砲だと決め付けているのです。満鉄爆破の謀略で始まつた満州事變の時と同じでした。そして今度もまた「暴支膺懲」、「乱暴な支那を懲らしめよ」と、国民世論を中国打倒に煽り立てる結果になつたのです。

高松宮は事件の背景にも鋭く目を向けています。「発砲は支那が先か知らないが、発砲させるような演習をすることに十二分の欠点がある。支那の兵營に突撃の教練をしたり、内地と同様に演習をしたりするのは不謹慎だ」と云うのです。北京は当時北平と云っていました。蒋介石が昭和三年に北伐と云つて、北方軍閥を追い払つて北京に入城した時、国民政府の首都は南京でしたから、一つの国に二つの都があるのはよくないと、北伐平定にちなんで北平と改名したのです。ですから盧溝橋で演習をすると云うのは、日本で云えば古都京都の鴨川で演習するようなものなのです。しかも中国軍隊の目と鼻の先で、我が物顔の演習をしたのですから、反日感情を煽ることにもなり、ここに最大の問題点があつたと云つてもいいでしょう。

高松宮はさらに「現地で停戦解決せんとすれば、中央で大げさにする。宜しく外交官をして外交をさせるのが、戦略ではないかと反問したいばかりだ。ところが今度も外交官がやけに消極的だ」。そして「近衛がすっかり軍部におぶさつてしまつている感じだ」と、近衛首相にリーダーシップがないこと、外務省の消極的な姿勢に不満を書いています。私はこの高松宮の一言一言に、盧溝橋事件を発生させ、また拡大させた最大の要因があつたと思ひます。問題は、どちらが先に撃つたのかではなく、日本がどのように処理しようとしたかでした。広大な面積、

膨大な人口を持つ中国が、ひとたび民族戦争の形で長期抗戦を展開したら、それがどんなに恐るべき結果をもたらすのか。近衛内閣は深い考慮と検討を加える暇もなく、拡大派に引きずられる形で、中国大陸の奥深く無謀な突入を始めてしまったのです。

ところで、「なぜ盧溝橋事件が起こったのか」と突き詰めていけば、「そこに日本軍がいたから」と言うことになります。ではどうして、北京と云うかつての都に日本の軍隊がいたのでしょうか。話は明治三十三年、百四年前の義和団事件にさかのぼります。ドイツが青島、ロシアが旅順、イギリスが香港対岸の九竜半島を租借地として取り上げた時、列強の侵略に怒った中国民衆が攘夷運動を起しました。義和拳と云って拳法、拳を武器にした集団が北京の各国公使館を包囲攻撃しましたから、日本をはじめ十一か国は連合軍を編成して鎮圧しました。そして翌年、清国との間に講和条約とも云うべき北京議定書に調印しましたが、列国は居留民保護のためと、こうした暴動に素早く対処出来るようにと、軍隊の駐留権を清国に認めさせたのです。北京公使館の警備兵のほか、北京と海岸の間の鉄道交通を確保するため、天津とか山海関に軍隊を置いたのですが、国際会議で日本に割り当てられた兵力は千五百七十名でした。

日本は北清駐屯軍を編成して天津に司令部を置きましたが、清国が革命で倒れて中華民国と代わってからも、支那駐屯軍と名称を変えただけで、駐兵権はそのまま続いていました。ただこの段階では、駐屯軍と云ってもせいぜい三個大隊程度の小規模なものでしたし、主力は山海関を中心に天津から東に配置してしましたから、盧溝橋で演習するような事態は起るはずもなかったのです。ところが日本は昭和十一年四月、突然、支那駐屯軍を三倍以上の五千七百七十四名に増強しました。しかも北京のすぐそばの豊台に増兵部隊を駐屯させましたから、中国側は「日本の侵略態勢の強化だ」と反発したのです。

北京や天津にはアメリカ、イギリスも軍隊を置いていましたが、各国は中国国内の不安な情勢から、必要に応じて中国側に通告するだけで、兵力増減の措置をとってききました。日本の増兵もこの慣例にならったものですが、実はその背景には瀬島龍三さん、戦争中大本営参謀を務め、戦後伊藤忠の会長をされた瀬島さんが、「日本が支那事変に突入した最大の禍根は、現地軍の不用意な華北工作にあった」。こう指摘する華北工作の行き過ぎを、軌道修正する狙いがあったと云うのです。結果的には、この兵力増強が盧溝橋事件につながってしまったのですから、ここにも日本側の意図と中国側の受けとめ方には、大きな食い違いがあったこととなります。

華北工作と云うのは、地図をご覧になって頂くと、北京、天津のある河北省、山東、山西、綏遠、チャハルの五つの省を華北と云いますが、一言で云えば、この華北五省を国民政府から引き離して日本の支配下に置こうと、関東軍が中心に

なつて進めた分離工作です。満蒙を「日本の生命線」として満州事変を起こした関東軍ですが、それが手に入ると、今度は生命線を守るための「安全地帯」が必要になったと云うわけです。華北の豊富な資源、鉄とか石炭、石油や棉花も大きな魅力でした。

まず昭和十年五月、天津で親日派の中国人新聞社社長が相次いで暗殺される事件が起こると、関東軍は支那駐屯軍をけしかけて、「こうした抗日テロは国民政府が煽っているからだ」と難癖をつけ、河北省から政府機関や政府軍を追い出してしまったのです。中国統一を急いでいた蒋介石は、共産軍討伐を最優先にしてきましたから、日本に対しては一面妥協的な姿勢を取っていました。ところが日本は十一月に入ると、早稲田大学を出た親日派の殷汝耕を担いで、通州に冀東防共自治委員会という傀儡政権を作ったのです。冀東の冀と云うのは河北省のことですが、殷は「反蒋介石宣言」をして、それまでの高率関税を一律四分の一に引き下げてしまいました。当然、華北の輸入は冀東経由に振り替わるものが続出し、関税を国庫収入の柱としてきた国民政府には大きな痛手となりました。

北京には政府軍に代わって、地方軍閥である宋哲元の第二十九軍が入っていました。日本はさらにこの宋を華北工作の中心に押し立てようとしたのです。慌てた国民政府は先手を打って、宋に冀察政務委員会を組織させました。冀察の察は宋の地盤であるチャハル省のことですが、宋哲元に北京、天津地区のある程度の権限を与え、国民政府側に引き止めると共に、日本の華北工作の防波堤にする狙いです。宋哲元はもともとは反蒋介石系の軍人でしたから、国民政府にも日本にも不即不離。どっちつかずのあいまいな態度を取り続けましたが、北京で学生一万人が「抗日救国デモ」をしたのをきっかけに、激しい抗日運動の波が中国全土に広がっていきまし、それは二十九軍の兵士たちに浸透していったのです。

こうした華北工作に危機感を持ったのが、参謀本部作戦課長の石原莞爾大佐です。満州事変謀略の中心人物だった石原ですが、その石原を愕然とさせたのが、極東ソ連軍との大きな戦力の開きでした。兵力、戦車、飛行機と、どれをとつても満州、朝鮮の日本軍の三倍から五倍以上です。石原は、満州国と云う既成事実の強化に努め、軍備充実と日本の重工業化を急がなければダメだ。それが完成するまでは、対外的な紛争、ことに中国とゴタゴタを起こしてはいけない。それには蒋介石を刺激するようなことはせず、政府間交渉で蒋介石に排日停止、日本との共同防共、満州国承認、少なくとも黙認を約束させるべきだ。これが石原の考えでした。そこで石原は華北工作の行き過ぎを直すため、十一年一月、陸軍省や外務省を動かして「北支処理要綱」なるものを作らせたのです。過激な関東軍を華北工作から手を引かせ、ソ連との戦いの備えに専念させる。代わって比較的穏健な支那駐屯軍に当たらせることにしたのですが、何といつても小兵力です。関東軍は「支那駐屯軍支援」を口実にして、いろいろちよつかいを出してきます。これ

では何にもならないので、関東軍の口出しを封ずるために取った措置が、支那駐屯軍の兵力増強だったと云うのです。駐屯軍司令官を天皇が任命する親補職、師団長並みに格上げして、一年交替制だった部隊を長期駐在制にする。瀬島さんは「那駐屯軍の組織をしつかりしたものに、関東軍を抑えるのが狙いだった」と云っていますが、どうだったのでしょうか。

この「北支処理要綱」が分離工作を一切やめると云うのならともかく、内容は依然として華北五省に自治政府を作らせ、分かれて統治する分治案。ただ「穏やかに漸進的に進める」としただけなのです。云ってみれば、「関東軍抑制」と云うのは日本のお家の事情であつて、突然の兵力増強が中国側には、侵略態勢の強化と映ったのも無理はありません。しかも増兵部隊が駐屯した豊台は、北京から天津を経て南京を結と鉄道の要衝でしたから、中国は反発を強めました。駐屯地として、最初は親日的な冀東政権のある通州を考えたのですが、北京より万里長城側です。これだと北京議定書に定められた駐屯地の規定、海岸との鉄道交通確保と云う規定に違反する恐れがあり、北京と海岸を結ぶ線上にある豊台ならよからうと、変更したことも裏目に出ました。

そこへ中国側を刺激したのが、関東軍参謀田中隆吉大佐の起こした綏遠事件です。田中は満州事変の時、上海で日本人僧侶を殺させて騒ぎを起こし、そのドサクサに紛れて満州国を建国させた、第一次上海事変の張本人です。宋哲元が当てにならないと見た田中は、十一年十一月、軍事援助をしてきた内蒙古の王族徳王に、綏遠省に攻め込ませたのです。蒋介石は二十万の大軍を北上させ、自ら洛陽に進出して指揮を執りました。徳王軍は大敗し、「後ろで糸をひいている関東軍を破った」と云うので中国軍の氣勢も上がり、かえって抗日運動を勢いづかせる結果になってしまいました。

石原は戦後、「支那駐屯軍増強という方法をとらず、統制の威力によって、関東軍に手を引かせるようにすればよかった」と反省の弁を語っています。しかし満州事変謀略の画策者として、強引に独断専行、統制を無視してきたのは、その石原なのです。しかも陸軍の参謀の間には一種の「石原現象」が起きていました。石原の華々しい成功が「結果良ければ全て良し。機会さえあればオレたちも」と、功名心、出世欲をかき立てたのです。石原自ら統制を破ってきたのですから、とても統制の威力は期待出来なかつたのではないのでしょうか。現に石原は、綏遠事件が起こるとすぐ現地に飛んで、関東軍にストップをかけようとはしました。ところが参謀の武藤章大佐から、「石原さん、われわれはあなたが満州事変でやられたことを、しているに過ぎませんよ」と云われて、返す言葉もなかつたと云います。私は、この石原自身が感じていた「後ろめたさ」。これが盧溝橋事件解決に大きな影を落としたように思います。

事件が発生した時、石原は少将に昇進し作戦部長になっていましたが、参謀総

長は閑院宮様でいわば飾りもの。実質的に参謀本部を取り仕切る参謀次長は病氣入院中でしたから、作戰部長の石原が参謀本部を動かす大きな力を持っていたのです。ところが石原の下で作戰課長になったのが拡大派の武藤章、綏遠事件で石原に言い返した武藤でした。拡大か不拡大かで二人が大声でやり合う声が、廊下の外まで聞こえたと言います。石原は後で「飼い犬に手をかまれた」と云つたそうですが、あの石原が不拡大を押し通すことが出来なかつたのですから、この人事の食い違いもまた、不幸なことでした。

ところで田中大佐が起こした綏遠事件は、西安事件と云う、ある意味では日中戦争の行方を左右することになる、「内戦停止、一致抗日」の重大な副産物を生むことになったのです。「蒋介石が西安で、張学良によって監禁された」。この西安事件のスクープを世界に打電したのは、同盟通信上海支社長の松本重治です。西安はかつて漢や隋、唐の都として栄えた長安のことですが、徳王軍との戦いに洛陽に行っていた蒋介石が、「西安に向かつたまま連絡が取れない。何かあつたのではないか」。南京支局からこう云う連絡を受けた松本は、長年の上海勤務で培つてきた情報網に当たり、監禁の事実を掴むと東京に打電したのです。昭和十一年十二月十二日夜十時過ぎのことでした。

その頃毛沢東の率いる共産軍は、蒋介石軍の攻撃を逃れて一万二千五百<sup>キロ</sup>の長征の最中でした。四川省、雲南省と、四千<sup>キロ</sup>クラスの険しい山々を越え、戦いながら移動するですから、昭和九年に華南の革命根拠地を出発した時、三十万を数えた共産軍の主力は三万に減っていました。蒋介石はこの共産軍の息の根を止めようと、洛陽まで来た機会に、張学良軍の攻撃督励に西安に向かつたのです。しかし張学良にとつて日本軍は、昭和三年に父張作霖を爆殺したにつつき敵です。必死になつて「戦うべき相手は日本軍だ」と説きましたが、聞き入れません。張学良は十二日朝、軍隊で蒋介石の宿舎を包囲し監禁したのです。

素早く反応したのが、中国共産党です。一説には、毛沢東は「蒋介石殺害」主張したと云われますが、周恩来が説得して「蒋介石は殺さずに、抗日統一戦線の先頭に立てる」。こう云う方針を決めると、周恩来が十七日、飛行機で西安に飛びました。周恩来は、蒋介石が国民党の中核将校養成のため日本の陸軍士官学校に当たる黄甫軍官学校を設立して校長になつた時、その下で教官を務めましたから旧知の間柄です。周恩来は、蒋介石の中国での指導的地位を認めた上で、「一致抗日」の必要を訴え、張学良には蒋介石の釈放を要請したのです。二十五日に解放された蒋介石は、西安攻撃に向かう政府軍に撤退命令を出し、国民党と共産党の「国共合作」は、まず「内戦停止」という形で動き出しました。十二年二月から始まつた停戦会議では、共産軍を国民政府軍事委員会の指揮下に入れることが決まり、毛沢東も共産党の全国代表者会議で、「幾百万、幾千万の大衆を、抗日民族統一戦線に引き入れるため戦え」と檄を飛ばしたのです。張学良はこの後、軍法

会議で禁固十年の判決を受け、戦後も長く軟禁状態に置かれていたが、三年前の二〇〇一年、ハワイで百歳の長寿を全うしています。

こうした動きは当然のことながら、日本側にも中国政策の再検討を促すことになったのです。内閣は十二年二月に広田弘毅内閣に代わり、陸軍大将の林銑十郎内閣になっていましたが、うまいことを云うもので「何もせんじゅうろう内閣」無為無策、四か月の短命内閣でしたが、唯一の収穫がフランス大使から外務大臣に起用した佐藤尚武だったかも知れません。佐藤は津軽藩士の家に生まれ、外務省では広田の一期先輩。敗戦の時、ソ連大使としていち早く「ポツダム宣言受諾すべし」の意見電報を打ち、戦後は参議院議長になっています。

外相就任を要請された佐藤は、「平和外交」を入閣の条件としました。林首相と陸軍大臣の杉山元に、「中国と平等の立場での国交調節を、一部世論との衝突を覚悟して断行する必要がある」と申し入れたのです。対中国強硬論が幅をきかしている世論と衝突を覚悟しているあたり、佐藤の気骨と信念のほどが窺えます。その佐藤外相がまずやったのが、中国政策の大きな転換でした。佐藤は貴族院で「これまでの支那外交は全て失敗に終わっている」と明言し、行き詰まりを打開するには「日本がこれまでの中国に対する優越感、侮蔑感を払拭し、対等の国同士として交渉しなければダメだ」と、率直に所信を表明しました。さらに衆議院で「日本が戦争の危機に直面するかもしれないも、日本自体の考えによって決まる」と断言したのです。当時としてはかなり思い切ったことを云ったもので、売れっ子の辛口評論家室伏高信が「今の外務省に、これだけの気力がある者があるうとは思っていません。日本の外務省は軍部の一局でしかないと考えてきたし、また実際においてもその通りであった。この空気のうちにあつて、佐藤外相が躊躇することなくその所信を披瀝したことは、近來の大出来であつた」と、雑誌に書いたほどでした。

佐藤は中国政策転換の具体策として、四月十六日、首相と陸海軍大臣を交えた四相会議で、「華北の分治を図ったり、支那の内政を乱す恐れのあるような政治工作は行なわない」。つまり「華北工作中止」の方針を決めたのです。今後の指導方策としても「国民政府の中国統一運動に対しては公正な態度で臨み、国民政府の面子を考えて、国民の手前抗日を掲げざるを得なくなるような措置は避ける」としています。陸軍を強引な華北工作から政策転換させた陰には、石原莞爾の力も与って大きかったのです。石原は西安事件が起こるとすぐ、参謀本部としての今後の方針をまとめていますが、それはこう云うものでした。支那駐屯軍には政治、経済的な指導はやめさせ、北京には外交機関を置く。宋哲元の冀察政権との交渉は融和了解を主として、強いて日本の権益を獲得するような行動は避ける。

どうだったのでしょうか。当時の日本に強力な指導力のある首相がいて、この佐藤―石原ラインによる新しい外交方針を推進していたら、その後の日中の歴史

は随分変わっていたのではないでしょうか。残念なことに権力の座にいたのは、何の定見もないロボット首相の林でした。そしてせめて次の近衛内閣外相に、剛直な信念のある佐藤がそのまま留任していたら、高松宮が「外交官がやけに消極的だ」と嘆くようなことはなかったと思います。

近衛内閣外相になったのは、元首相の広田弘毅でした。なぜ佐藤を留任させなかったのか。近衛は広田に借りがあったのです。二・二六事件の直後、元老西園寺公望の推薦で組閣の大命を受けた近衛は、健康を理由に逃げてしまいました。後継首相の選考が行き詰まり、外務大臣の広田の名前が出てきた時、近衛は自分が逃げた手前、広田担ぎ出しに積極的に動いたのです。ところがその広田内閣が財政の破綻から、ほとんど野垂れ死にのような形で総辞職に追い込まれ、責任を感じていた近衛は、広田に再起の場を提供したというわけです。

また佐藤外交には、陸軍強硬派や右翼から「あれは舶来日本人だ。満州を返せ」と云っている支那と、親善や提携が出来ると思っているのか」。こんな強い不満が出ていました。関東軍参謀長の東条英機、戦争中の首相東条も「国民政府を一撃せよ」と、強硬な意見具申を参謀本部にしていました。「国民政府にこちらから進んで親善を求めるのは、かえって排日毎日の態度を増長させるだけだ」と云うのです。敵を作ることを好まない近衛です。大物外交官で無難な広田を選んだわけですが、この外相人事にも盧溝橋の蹟きがありました。広田はかつて外相時代、陸軍の華北工作に何度も煮え湯を飲まされました。しかも首相になった時、当時陸軍省軍事課員だった武藤章から閣僚人事に横槍を入れられ、ほとんど陸軍のロボット内閣とも云うべき存在になってしまいました。一度陸軍の前に膝を屈した広田に、齒向かうだけの氣力を望んでもとても無理だったでしょう。

短命に終わった佐藤外交でしたが、華北工作の中止が外部に公表されたわけはありません。まして新たな分離工作は中止しても、これまでの既得権を盾にとった支那駐屯軍の要求は続いています。豊台駐屯の第三大隊では、田園地帯の豊台で演習をやれば反日感情を刺激するとの配慮から、演習地として盧溝橋一帯の荒地地を買収しようとしてきました。ところが盧溝橋もまた、北京と漢口を結ぶ鉄道の要衝です。国民政府は「日本が豊台、盧溝橋と、北京の南の玄関口を押さえようとしている」と反発し、地主に土地売却を禁じたのです。ところが日本軍が交渉が纏らないままに演習地として勝手に使い始めたため、二十九軍の兵隊が日本の将校を殴ったとか、小競り合いが続くようになっていたのです。

華北に連絡や視察に行った将校も、口々に「日中両軍著しく緊張し、一触即発の情勢にある」と報告してきました。しかも六月に入ってから、参謀本部戦争指導課長の河辺虎四郎大佐は変な噂をちよくちよく聞くようになったのです。河辺は敗戦の時の参謀次長で、特使としてマニラに飛び連合軍進駐の段取りをつけた人ですが、「華北で、満州事変と同じような事件が起こる。支那駐屯軍の参謀が

計画している」と云う噂です。気になった河辺は石原に報告し、急遽陸軍省軍務課長の柴山兼四郎大佐を現地へ派遣しましたが、「現地では東京の考えをよく承知しており、豊台駐屯の部隊も小隊長以下よく自重している」とのことでした。しかしその後も「七月七日の晩」と日時まで特定して、「満州事変の二の舞の事件が起こる」と云う噂は絶えなかつたのです。北京駐在武官の今井武夫少佐も七月六日の夕方、盧溝橋事件の前日ですが、親しくしている中国軍の友人から変な電話を受けました。「日中両軍がきょう午後三時盧溝橋で衝突し、目下交戦中だ」と云うのです。今井が「そんなことはない」と否定すると、なぜか「事実、間違いない」と言い張ります。今井は後になって、「長年の交友から考えて、翌日七日の陰謀計画を事前に知らせた、好意的な予備通報だったので……」と話しています。

同盟通信の松本も不穏な情勢を心配して、天津の支那駐屯軍司令部を訪ねました。参謀長の橋本群少将は「宋哲元とは時々話し合っているし、第二十九軍の方から仕掛けるようなことはないと思う。むしろ日本側の方に多少問題がある。大陸浪人や一旗組が事あれかしと、七月七日に事件が起こるとか、いろんなデマを飛ばしている。司令部では嚴重に取り締まっているし、仮に事件が起きても、局地解決出来ると思うのでご安心頂きたい」。橋本は端正な姿勢、軍人にありがちな傲慢さもなく、盧溝橋事件が発生してからも現地解決に努力した人ですが、松本がただ一つ不安に感じたのは、軍司令官の田代皖一郎中将が危篤状態だったことです。下の参謀に強硬派を抱えていては、何か起こった時、軍司令官と参謀長では統制力が違います。松本は「不安が的中した」と云っていますが、この軍司令官不在も不幸なことでした。

実は、昭和天皇も心配されていたのです。何とか蒋介石と妥協しようと思ひ、杉山陸軍大臣と閑院宮参謀総長を呼ばれました。「満州は田舎だから、事件が起きても大したことはないが、天津や北京で起これば、必ず英米の干渉がひどくなる。陸軍の考えが自分と同じなら、近衛首相に話して、蒋介石と妥協させる考えだった」と云うのです。ところが杉山の見通しは、「天津で一撃を加えれば、事件は一か月以内に終わる」でした。「暗に私の意見とは違うことがわかったので、遺憾ながら妥協のことは言い出さなかつた。こうした危機に際して、盧溝橋事件は起こつたのだが、支那の方から仕掛けたとは思わない。つまりぬ争いから起こつたものと思う」と、天皇は云っています。

それにしても、ここまで一触即発の状況にあることがわかつていながら、なぜ夜間演習と云う、火中に油を注ぐようなことをしたのでしょうか。日本軍の演習は、確かに北京議定書の駐兵権によって認められたものです。どこで演習するかは明確な取り決めがなく、いわばどこでやっても勝手、ただ実弾射撃の場合だけ事前に実施の場所と日時を中国側に予告することになっていました。外国軍隊も演習をしていましたが、こちらはきらびやかな軍服でパレードするといった、教

練のようなものです。そんな中で、日本軍だけが日夜実戦ながらの演習に励んだのですから、ロンドン・タイムズの北京特派員が「これで事件が起きなければ奇跡だ」と云っていたくらいでした。

しかも「七月七日」と云う噂が流れていたのに、せめてその日だけでも演習をやる配慮は出来なかったのでしょうか。実は豊台駐屯の第三大隊は、九日に検閲を控えていたのです。検閲と云うのは、教わったことがきちんと身につけているかどうか、学校の学期末試験のようなものですが、陸軍はソ連との戦いに備えて夜間演習に重点を置いた訓練を強化していました。支那駐屯軍でも千葉の歩兵学校から教官を招いて、その戦闘方法を学んでいる最中だったのです。八日は検閲に備えて兵器の手入れに当て、七日を仕上げの演習日としたのですが、陸軍中央部で検閲延期とか、しばらく演習を見合わせるといった、臨機の措置を取るべきだったでしょう。無神経過ぎました。しかしそれも、杉山陸軍大臣が天皇に云ったように「なあと中国軍は大したことはない。一撃すれば簡単に手を上げる」。この日本陸軍全体の傲慢さにあつたのではないのでしょうか。盧溝橋事件を発生させ、拡大させた最大の要因は、この一撃論にあつたと思えます。そしてそれは、陸軍だけではなく、近衛首相にもあつたし、国民全般にも強かつたのです。

日中双方に陰謀説が渦巻き、何が起きても不思議ではない。これが盧溝橋事件前夜の状況でした。

×

×

近衛内閣が誕生したのは、盧溝橋事件の一月ほど前、昭和十二年の六月四日です。まさに「衆望を担つて」、この言葉がぴったりなほど、日本中が四十六歳の若き宰相を熱烈に歓迎したのです。五摂家筆頭の家柄、長身で、端正な風貌。あの弱々しい口調でラジオ放送をすると、政治に余り関心のない若い女性まで「近衛さんが演説する」と云つて、大騒ぎしてラジオのスイッチを入れたそうです。私は小学校の一年生になつたばかりでしたが、遊びにきた遠縁の京都大学の学生が、熱に浮かされたように「近衛、近衛」と云つていたのを、子供心によく覚えています。

二・二六事件の後、日本の社会全般に何となく陰鬱な気分がありました。新聞は早くから「近衛時代の幕開け」といった表現を使って、近衛の登場を促していましたし、「近衛なら、何か新しいことをやってくれるだろう」。軍部や右翼、政党からファッショ反対の知識人に至るまでが、それぞれの立場から近衛の清新さ、知性、革新性に期待したのです。徳富素峰は「雲晴れて日輪出でたる如し」と書きましたし、アララギ派の俳人五百木瓢亭は「五月晴れの富士の如くあらせられ」との句を近衛に贈りました。激動の時代に天皇家に最も近い名門の御曹司を迎え、何か神秘的な感銘を覚えて救世主のように拍手を送った国民が多かつたのです。その近衛が若くして「政界期待の星」になつたのは、何と云つても第一次世界大

戦が終わった直後、大正七年十二月に雑誌に発表した「英米本位の平和主義を排す」と云う論文です。近衛はこう云うのです。「戦後は民主主義、人道主義が盛んに昂揚されるだろうが、これは人間の平等感に基づくもので、その発達は望ましい。だが、英米の政治家の説く民主主義、人道主義は、彼等の利益に奉仕するものに過ぎない。欧州戦争は、現状維持を便利とする既成の強国と、現状打破を便利とする未成の強国の争いであつて、前者は平和を叫び、後者は戦争を唱えた。英米の平和主義は、現状維持を有利とする者の事なかれ主義であつて、必ずしも正義、人道にかなっていない」。近衛はまた、国際連盟についてもこう云っています。「日本は連盟加入に当たつて、少なくとも経済帝国主義の排除と、人種無差別待遇を主張すべきだ。これが認められなければ、領土狭く、資源乏しく、輸出市場も貧弱な日本は、自己生存の必要に迫られて、ドイツのように現状打破の挙に出なければならなくなる」。近衛が後に満州事変を認める立場を取つたのも、その出発点はこの論文にあつたのです。大学を出たばかり、二十七歳の青年が英米追隨批判の論陣を張つたのですから、大きな注目を集めました。

近衛のこうしたナシヨナリストの一面は、近衛が十二歳の時、四十歳の若さで亡くなつた父篤麿の影響が大きかつたようです。篤麿はアジア主義を唱えて東亞同文会を作り、日中友好、対露強硬外交の国民運動を展開した人です。近衛のお母さんは、生後八日目に亡くなつています。近衛は篤麿が再婚した妹の貞子に育てられたのですが、かなり大きくなるまで貞子を実母だと思つていたそうです。近衛自身、第一高等学校在学時代を「ひがみの多い憂鬱な青年だった」と云っていますが、東京帝国大学を半年でやめ、河上肇や西田幾太郎の哲学に憧れて京都大学に移つた背景には、この実母の死もあつたように思います。

哲学の教授になるのが志望だつたと云いますが、周りが放つておきません。元老の西園寺公望も、将来の首相候補、また自分の後継者として近衛に期待し、教育してきました。ただ西園寺は国際協調、ことに英米との協調を第一としてきましたから、近衛の反英米的な態度には不安を感じていました。また近衛が荒木貞夫、真崎甚三郎と云つた皇道派の將軍と親しく、満州事変を認める立場を取つたことにも不満でした。ですから首相にするには、もっと経綸を積んでから。これが西園寺の本心だつたのです。ところが皇道派の青年將校が二・二六事件を起こしました。愚図愚図しては陸軍内閣になると思い、後継首相にこの時も近衛を推薦しています。しかし近衛は、親しい皇道派の旗色が悪いため、陸軍をどうしていいか自信が持てず、健康を理由に逃げてしまいました。広田内閣の総辞職で推薦した陸軍大将の宇垣一成も、陸軍に反対され組閣出来ません。西園寺はつくづく嫌気がさしたのでしょう。後継首相の推薦を辞退すると云つていたのですが、林銑十郎首相が陸軍大臣の杉山を後釜に据えようとする、陸軍大臣を首相にするのはよくない」と、杉山案を一蹴してしまいました。「今まで近衛を出す

ことに躊躇していたが、自分にご相談とあらば、信念に基づかない者に賛成するわけにはいかない。近衛よりほかに適任者が無いと思う」。この一言で近衛内閣となったのです。

近衛が、これだけの人気と支持をバックに強い政治をやり、盧溝橋事件で指導力を発揮していたら、どうだったかと云う気がします。一番難物の陸軍でさえ、満州事変を肯定している近衛を歓迎していたのです。条件は揃っていたのです。会しところがムードだけあって信念のないのが、この貴公子のスタイルでした。会して議さず、集まっても議論しない。議して決さず、議論しても決定しない。決して行なわず、決定しても実行しない。近衛の優柔不断さを実によく言い表わした言葉だと思いますが、実は歓迎一色の近衛内閣誕生直後に、早くも首相としての資質に疑問を投げかけていた人がいたのです。東京日日新聞、現在の毎日新聞記者として活躍し、戦後NHKの会長をした阿部真之助です。

阿部は文芸春秋の七月号に、「苦勞らしい苦勞一つせずに、首相になった近衛の精神力、体力が、非常時と云う普段より凶暴な波風に堪えられるか」と書いています。確かに近衛は、大学生の時からもう公爵、貴族院議員でした。役人をしたこともなく、一度の閣僚経験もなしに、いきなり首相になったのは近衛だけです。しかも大臣病患者の多い日本で、首相になりたくないと思っただけのも、この人くらしいものでしょう。今度も愛人の家に隠れているところを、京都大学時代の友人で、やがて内大臣になる木戸幸一に見つかり「二度の大命辞退は臣下の道でない」と諭され、観念したのです。しかし阿部が心配したように、難しい問題にぶつかるたびにすぐ寝込んでしまい、「辞めたい」と洩らす近衛でした。

近衛はまた「側近三千人」と云われるほど、右から左に至るまで、大変交友の広い人でした。一高、京大時代の同級生後藤隆之助は、早くから近衛が首相になった時のためにと、学者やジャーナリストを集めて「昭和研究会」を組織し、近衛のブレイン・トラストになっています。近衛内閣で書記官長、現在の官房長官になった風見章も、昭和研究会に属する代議士でした。阿部真之助は近衛の周りに人が集まったのは、「自分の意見を云わずに聞き役に回ったからだ。自ら語る」と極めて簡潔で、言葉に含蓄があり、もっとも反対に表現が曖昧だからとも云っています。それがそれぞれの立場で、近衛を自分の味方だと思込ませているのだ」と云っています。

ある人は、この内閣をファッショに対する最後の砦だと見ましたし、またある人は、ファッショに達する最後の飛び石と見ました。しかし阿部は、近衛が仮装会でナチス・ドイツのヒットラーに扮装したのをとらえて、そこに近衛の本心が潜んでいると云っています。「ファッショは元来実行者で、実行した後で理論をくつつける。ところが近衛は、実行性のないファッショだ」と云うのです。「理論抜きで猛進するようなことは、近衛の性格から見て出来ない。実生活の苦しみを

知らない者が、空想的になるのは自然の成り行きで、善良さや良心的なことは貴族の特徴だが、実行力にはなはだ欠けている。生き代わり死に代わり、食い付いたら放さない執念は、生活の困難が教える。生活を持たない、あの階級の人々には、最も乏しい素質なのだ」。これが阿部の「近衛文麿論」ですが、さすが阿部真之助と云う感じがします。まさに三度首相になった近衛に、常について回ったのが実行力のなさでした。

首相になった近衛が真つ先に考えたのが、国内の対立をなくすため、二・二六事件の関係者や左翼を大赦によって放免することだったと云うのですから、何ともお粗末な話でした。右にも左にもいい顔をした。いかにも近衛らしい発想ですが、西園寺も「近衛は何を考えているのか」とマユをひそめたそうです。天皇まで心配されているのに、なぜ一触即発の華北情勢に目が向かなかったのか。昭和研究会では支那問題委員会を作っていました。しかし意見が分かれて纏らず、盧溝橋事件前夜も、西安事件の影響を話し合っている最中だったと云います。つまり、近衛内閣が中国政策について、何ら具体的な新しい構想も持たないまま、内閣成立三十三日目にぶつかつたのが盧溝橋事件だったのです。

最初の一発は、誰が撃つたのか。七月八日朝、陸軍大臣の杉山は内閣書記官長の風見に、「わが方にとつては、全くの偶発事件である」と報告しています。しかし近衛はとつさに、「まさか、日本陸軍の計画的行動ではあるまいな」と云つたそうです。外務省東亞局長の石射猪太郎も、「また、やりやがった」と思った一人です。とにかく張作霖爆殺事件に始まり、満州事変、上海事変と、謀略の歴史がいっぱいありますし、華北工作もしました。変な噂も流れていましたし、疑われても仕方ないのですが、私は日本軍の謀略はなかつたように思います。

軍司令官が危篤状態であり、北京の主力部隊は通州で徹夜の演習をやっています。実質的な責任者である歩兵旅団長の河辺正三少将、この人は河辺戦争指導課長の兄さんですが、その検閲のため通州に出張中でした。日本側で謀略計画を立てたのなら、発砲事件に即応できるよう万全の態勢を取っていたでしょう。清水大尉の第八中隊にしても、七日の夕食を早めに食べたきりで、丸三十一時間、空腹を抱えて炎天下で戦闘したのです。中隊長以下純然たる演習の装備で、鉄兜もかぶっていませんでした。

中国共産党の謀略説もあります。共産党は八日朝、いち早く国民政府に「即時開戦」の電報を打ち、全面戦争を促しています。事件を拡大させようと、いろいろな工作もしました。北京駐在武官の今井の話だと、毎晩のように不審な銃声がするので、第二十九軍の将校と駆け付けると、一団の男女の学生が爆竹を鳴らしています。学生たちを検挙すると、今井が日本の将校とは知らずに、「われわれは共産党北方局の命令でやっているのに、なぜ邪魔するのか」と食つてかかつたそうです。北方局の責任者は劉少奇、やがて国家主席となり、文化大革命で

批判され悲惨な死を迎えた劉少奇です。連隊長の牟田口も、「劉少奇が北京に来ていたと聞いて、共産軍の陰謀だと思った」と云っています。

しかし、事件を拡大させようと画策した者は、日本側にもいたのです。支那駐屯軍の強硬派のある参謀は、「衝突拡大のため、部下を使って爆竹を鳴らさせたが、不思議なことに、我々以外にも同じようなことをやっている連中がいた」。こう云っていますし、関東軍も八日朝と云う異例の早さで、「多大な関心と重大な決意を有す」との声明を出し、支那駐屯軍にも「徹底的に叩け」と電報してきました。関東軍参謀の辻政信大尉も北京にやってきて、牟田口連隊長に「関東軍がご援助します。思う存分やって下さい」とけしかけたそうです。

こうした謀略説を否定するのは、北京特務機関補佐官としていち早く現場に駆け付け、停戦交渉に努力した寺平忠輔大尉です。清水中隊長たちは異口同音に、「弾丸は全て龍王廟の南側の堤防上から飛んできた」と云っていたそうです。弾丸の閃光はかなりの間隔があり、数名の者が交互に発射したと考えられること。日中両軍の距離は千仞ならず、しかも平坦な土地で、その間にどっち側にせよ、銃を持った作員が潜り込むのは不可能だと、寺平は云うのです。寺平は、清水中隊長が龍王廟の東側に固まったのを見て、第二十九軍の兵隊が警戒感を強めているところへ、日本軍が誤って軽機関銃の空砲射撃をした。「来た」と思った瞬間、思わず引き金を引いてしまった。寺平は、最初の発砲が二、三発で終わったことから見ても、「決して他意があったとは思われない」と云っています。続いて集合ラッパが鳴り、「今度こそ攻撃開始のラッパだ。撃て、撃て」となったのではないかと云うのです。

私にはこの寺平の「偶発説」が、一番真相に近いように思えます。しかしいざこれにしろ、現地の日中双方に拡大しようとする謀略が渦巻いていたのですから、問題は日本がどう局地事件で処理するか。この点にかかっています。実は陸軍中央部も、拡大派と不拡大派とに割れていたのです。第一報を聞いて、柴山軍務課長は「やっかいな事が起こったな」ところが武藤作戦課長は、「愉快な事が起こったね」と云ったそうです。陸軍省は柴山を除けば、大臣の杉山以下樂觀的な一派。参謀本部は石原作戦部長、河辺戦争指導課長が不拡大派でしたが、武藤のように「千載一遇の好機だ」と出兵を主張する拡大派も大勢いました。支那課長なんか、「動員をやったら、必ず上陸しなければならぬと考えるから、控え目になる。上陸せんでもよいから、船をもつていくだけで北京は参るだろう」と云っていたくらいです。支那課と云うのは、本来中国問題の専門家なのですが、チャンコロ思想に固まっていて、「やれ、やれ」とけしかけるだけ。山東省だけで三千万人、満州と同じくらいの人口があると云うのに、「一省一個師団として、華北五省には五個師団持つて行けば十分だ」と云っていたそうです。

それでも参謀本部は八日夕、「事件の拡大を防止するため、さらに進んで兵力

を行使することを避けるべし」。こう云う命令を那駐屯軍司令官に出しました。石原の「武力行使は局面拡大につながる。ひとたび日中抗争に陥れば、果てしない荒野に無限の進軍命令を出すようなものだ」。この主張が通ったのです。九日の閣議も「不拡大、現地解決」の方針を決定しました。ところが十日になると、事態は出兵、拡大へ向けて急ピッチで動き出したのです。支那駐屯軍は六千人たらずなのに、中国軍は宋哲元の第二十九軍を中心に二十万です。そこへ「蒋介石軍北上」のニュースが大げさに伝えられ、「北京、天津の在留邦人一万二千人の生命、財産をどうやって守るのか」と、出兵論が勢いづいてきたのです。

石原は体が弱い上、徹夜続きで目は真っ赤。河辺戦争指導課長が「朝の間は、部長の云うことは相手にするな」と部下に云うほど、神経衰弱気味だったと云います。「万一、手薄のまま包囲され、全滅させられたら」。この軍人の本能、作戦部長としての責任感が頭をもたげたのでしよう。ついに武藤作戦課長が立てた動員計画、内地から三個師団、朝鮮から一個師団、関東軍から二個旅団、計五個師団の動員案に、石原は決済のハンを捺してしまつたのです。河辺が「不拡大で行くなら、内地動員はかけない方がいい」。こう云つて反対すると、石原は苦渋に顔をゆがめながら、机の上の地図を指さして、「この配置を見る。貴公の兄貴の旅団が全滅するのを見送つていて良いと思うのか」と云つたそうです。

七月十一日、杉山陸相の要請で緊急臨時閣議が招集されましたが、政府にも陸軍にも、そして現地軍にとつても、大変忙しい日曜日になりました。盧溝橋事件が支那事変へと拡大する運命は、まさにこの日一日にかかつていたのです。石原は一夜明けて、自分のハンで動員案が動き出したのですから、「しまつた」と思つたのでしよう。朝八時過ぎ、近衛を永田町の私邸に訪ねると「本日の閣議で動員案を否決してくれ」と申し出たのです。自分で決済したものを「否決しろ」と云うのも異常ですが、石原が後で「何となく薄暗がりの中で仕事をやった気持ちだつた」と後悔したように、石原の心の揺れを物語っています。ところが近衛には、この申し出が陸軍の無統制と映りました。近衛は敗戦後自殺するまで、盧溝橋事件を「陸軍の謀略だ」と疑つていたのですが、うっかり乗つて後で引つ繰り返されてはと、様子見をしたのです。私はこの近衛の謀略思い込みが、その後も近衛の決心を鈍らせ、政府の対策を後手後手にすることになつたように思います。

外務省東亜局の太田と云う主席事務官の家にも、重安という陸軍軍務課員から電話がかかつてきました。「陸軍省内の大勢いかんともしがたく、軍務局長も動員案にハンを捺してしまつた。この上は閣議で、外務大臣にその決定を阻止して貰うよりほかはない」と云うのです。太田から報告を受けた石射東亜局長はすぐ東京駅に駆け付け、鶴沼から上京してきた広田外相に電話の内容を伝えました。「内地師団の動員決定だけでも、中国側を刺激する。陸軍に頼まれるまでもなく絶対に反対して頂きたい」と進言すると、広田も「無論反対する」と答えたのだそ

うです。閣議に先立って開かれた五相会議で、杉山陸相は「支那駐屯軍と居留民を見殺しにするに忍びず、たつて出兵を」と提案しましたが、海軍大臣の米内光政は反対です。「出兵が事件を拡大することは、火を見るより明らかだ」と主張しましたが、杉山は樂觀的でした。「出兵の声明だけで、中国側の謝罪と将来の保証を確保出来る」と云うのです。結局「あくまで事件不拡大、現地解決を強調する。動員も派兵する必要がなくなったら、直ちに中止する」。この二点を確認して、午後二時からの閣議で陸軍の派兵案は承認されたのです。

この事件を「北支事変」と呼ぶことも決まりましたが、広田は一体何をしていたのでしょうか。「自衛のため必要が生じた場合に限り」と云う、条件付の万一のための準備動員だったから」。こう弁解する広田に、石射東亜局長は「いたく失望した」と云っています。たとえ条件付にせよ動員を閣議決定したことは、拡大派を勢いづかせることになったのです。「自衛のため」などという理由は、どうにでもこじつけられるのですから、これが第一の失敗でした。

前外相の佐藤尚武は広田に、「騒ぎを大きくしないためにも、支那駐屯軍を万里長城の線まで下げたらどうか」。思い切った提案をしましたが、広田は全く消極的だったそうです。河辺戦争指導課長は昭和十五年になつてからですが、当時陸軍大尉の竹田宮恒徳王にこう話しています。「広田さんは何しろ、軍の意向を聞かなければ外相としての仕事は出来ないという状況で、『正しいと思うことはあなたが強調し、実行されたらいかがですか』と申し上げたことがある」。佐藤が外相だったら外務省が主導権を握り、もつと積極的に動いていたでしょう。

この間、現地では小競り合いが続く中、停戦への努力が続けられ、十一日正午頃には冀察政権側とほぼ了解点に達していました。橋本駐屯軍参謀長は陸軍中央部に、「現地停戦協定の見込みが強い」ことを打電し、続いて「現地軍としては派兵の必要を認めない」と、冷静な意見具申の電報も打つていたのでした。電報は閣議決定直後に届きましたが、この時点で派兵は見送るべきだったでしょう。ところが内地師団の動員発令を見合わせただけで、満州、朝鮮からの派遣は予定通り発令されてしまいました。夜八時には現地停戦協定が結ばれ、しかも現地で「いらない」と云っているのに、二個師団も送り込んだのです。せっかく鎮火させたところへ、ガソリントラック車を送つたようなものでした。杉山は後で「華北の形勢が樂觀出来ないし、協定が守られる保証もない」と弁解しましたが、この人は「便所のドア」と陰口された人です。あの頃の公衆便所のドアは、どっちにも開きます。強い方になびく大勢順応型で、拡大派の強硬意見に押されて、現地の和平努力を無視したのです。

近衛は閣議を終えると、天皇に経過の説明と出兵の裁可を得るため、葉山のご用邸に向かいました。昭和天皇は政府の決定には、たとえ自分の考えとは違つていても、従われるようにされてきましたが、出兵に不満の様子は近衛にもわかつ

たのでしよう。内大臣に「もし出兵に反対すれば、陸軍大臣が辞職し、内閣も総辞職しなければならぬ。私が辞めても、誰かが局面を処理しなければならぬのだから、私が責任をもって当たるほかない」と云ったそうです。しかし、この近衛の決意には「出兵の決意を示せば、それだけで中国側は折れるに違いない」。こう云う、杉山同様の安易な判断があったのではないのでしょうか。

近衛という人は、陸軍にコントロールされまいとして、むしろ陸軍の先手を打って、リードして行こう。こう云う意識が強かったと云います。ここからの近衛は、まさに出兵の先頭に立って、旗を振った感じさえするのです。まず午後六時過ぎ、「北支派兵」の政府声明を発表しました。「中国の謝罪と将来の保障を確保するため、重大決意をした」と云うのですが、これが第二の失敗でした。派兵を決めても、停戦協定成立の見通しがついていたのですから、何も仰々しく公表する必要はなかったのです。やつと停戦交渉をまとめて、ホッと一息ついていた今井少佐は、「近衛の頭は狂っていないか」と思ったそうです。中国側は「停戦協定を結んだのに、日本は武力で脅すのか」と、態度を硬化させました。

しかも政府の決意を示すため、近衛は首相官邸に政界、財界や言論界の幹部を相次いで招いて、協力を求めたのです。「挙国一致、国論統一」を図るためと云うのですが、夜の首相官邸はまるでお祭り騒ぎだったそうです。石射東亜局長は、「政府自ら氣勢をあげて、事件拡大の方向に滑り出さんとする気配だった」と云っています。政府がこうなんですから、停戦協定を喜ばない拡大派の協定潰しも露骨なものになっていきました。新聞社が協定成立の号外を発行しようとする、陸軍省の新聞班は「まだ本決まりでない」と云って押さえてしまい、深夜のラジオ放送で「停戦協定が成立したとは云うものの、誠意に基づくものかどうかは疑わしい。間もなく反古同然のものになることを覚悟しておかなければならない」。こんな新聞班の一中佐が勝手に作った原稿を、「陸軍当局談」として流したので、冀察政権側は不信感を募らせ「日本はすでに協定破棄の口実を作っている。日本の不拡大方針も停戦措置も、作戦準備が完了するまでの時間稼ぎではないのか」とねじ込んできたのです。

事態をさらに悪化させたのが、危篤の田代に代わって支那駐屯軍司令官として十二日に着任した香月清司中将です。停戦協定を結んだ橋本参謀長以下を睨みつけ、「腰抜けぞろい」と云わんばかりの剣幕。記者会見でも「断乎暴支膺懲の軍司令官としての決心は固まっている」と言明する有様です。東京を発つ時は不拡大の指示を納得していたのだそうですが、赴任途中に立ち寄った京城で朝鮮軍司令官の小磯国昭、戦争中東条の後に首相になった小磯に強硬論を吹き込まれ、すっかり拡大派に変わっていたのです。翌日、冀察政権に「排日派の罷免、北京城内の軍隊撤去」などを要求し、「実行出来なければ冀察政務委員会は解散し、第二十九軍は冀察から撤退せよ」と迫ったのです。しかも関東軍、朝鮮軍の応援を得て

武力発動の計画を立てたものですから、陸軍中央部もびっくりしました。こんな機関車を支那駐屯軍にくつつけておいたら、どこへ引つ張って行くかからんと云うので、柴山軍務課長らを派遣して手綱の引き締めにかかりましたが、香月の強硬態度は局地解決の道をますます遠ざけることになったのです。

蒋介石が廬山で、有名な「最後の関頭演説」をしたのは七月十七日です。国民政府は夏の間、政府機関を避暑地の廬山に移していました。関頭と云うのは、物事の分かれ目、瀬戸際のことですが、蒋介石はこう演説したのです。「我々は弱国である以上、もし最後の関頭に直面すれば、国家の生存を図るため全民族の生命を賭すだけのことである。その時には、もはや我々には中途で妥協することを許されない」。そして「満州が占領されて六年の長きにわたっており、衝突地点は北京の入り口である盧溝橋にまで迫っている。北京が昔の奉天になるとすれば、どうして南京が北京の二の舞にならないわけがあるうか」。蒋介石はこの事変を片付けるかどうかが、最後の関頭の境目であると位置付けたのです。

「我々は弱国ではあるが、わが民族の生命を保持せねばならず、祖先から託された歴史上の責任を負わざるを得ない。盧溝橋事件を日中戦争にまで拡大するかどうかは、全く日本政府の態度にかかっており、平和の望みが断たれるか否かの鍵は、日本軍隊の行動如何にかかっている」と訴えました。蒋介石が沈痛な表情で四十五分間にわたる演説を終えた時、会場は興奮し、拍手が鳴り止まなかったと云います。蒋介石の「徹底抗戦」の決意表明でしたが、盧溝橋事件を戦争に発展させるかどうかは、まさに日本にかかっていたのです。

作戦部長の石原が陸軍大臣室に乗り込んで、杉山に出兵反対を力説したのは十九日のことです。「このままでは全面戦争の危険が大きい。この際思い切つて、華北にあるわが軍隊を山海関の満州・支那国境まで下げる。そして近衛首相自ら南京に飛んで、蒋介石と膝詰めの日中問題を解決すべきだ」と迫つたのです。脇で聞いていた次官の梅津美治郎中将は、冷静な調子で突き放しました。「実はそうしたいのだが、その点につき総理に相談し、総理の自信を確かめたのか。また華北の邦人、多年の權益、財産を放棄すると云うのか。満州国はそれで安定し得るのか」。こう反問し、石原提案を積極的に進める姿勢を見せません。石原の方は数日前、書記官長の風見を通じて、近衛に蒋介石との頂上会談を打診し、近衛が乗り気なのを知つての行動だったのですが、陸軍首脳部は動きませんでした。と云いますのも、梅津は昭和十年、天津で中国人新聞社社長が暗殺された時の支那駐屯軍司令官。国民政府の軍事責任者である何応欽と梅津・何応欽協定を結んで、河北省から国民政府軍を追い出した、その当事者なのです。いわば日本の華北進出の第一歩を作り上げたのに、自分の手柄を否定するようなことをするわけもありません。

元老の西園寺は、「国を思わぬ所に持つていらつてもらうっちゃ困る」と心配してい

ました。秘書役の原田熊雄がこの西園寺の意向を伝えに近衛を訪ねると、近衛は胃腸をこわして寝込んでいるところでした。「外務大臣が何も報告してくれないし、陸軍大臣もいかにも頼りない」と愚痴をこぼします。原田は「一国の首相としての権威と責任を放棄した、無気力さを感じた」と云っていますが、そんな弱気になつてゐる時の石原提案です。「新しい物好き」の近衛には、この頂上会談が新鮮なものに映つたのでしよう。「それはいい考えかも知れない。自分は体が弱いので、命のある間に出来るだけのご奉公をしたいと考えている。看護婦を一人同道すれば差し支えないから、一つ南京に乗り込んで蒋介石と話し合つてみよう。至急手筈を整えてほしい」。こう云つて、風見に飛行機や随行団の手配を指示したと云うのです。

いまトップ会談は当たり前の話になっていますが、あの時代です。もし実現していたら、近衛は称賛に包まれ、「戦争を防いだ名宰相」として歴史に名前を残していたかも知れません。こじれた関係の修復は、早ければ早いほどいいのです。タイミング的にも絶好であり、作戦の責任者である石原が「日本軍を下げる」提案までしてゐたのです。杉山や梅津にしても、近衛の圧倒的な人気を考えれば、正面切つては反対出来なかつたでしょう。会談成功の可能性は極めて高かつたし、盧溝橋事件を局地事件で食い止める、最初にして最大のチャンスでした。

ところが、ここから近衛の決断のなさが顔を出し、石原提案はいつの間にか立ち消えになつてしまふのです。最初にブレーキをかけたのは、書記官長の風見でした。風見の気懸かりは、陸軍の統制力の問題です。仮に近衛が蒋介石と話をつけたにしても、果たして陸軍が呑むかどうか。陸軍首脳部が、近衛の決定した方針に従つて現地軍を統制することが出来なければ、話し合いのつけようもない。その保証がなければ、南京に出掛けていつてもムダになる。世界中が注目している会談だと云うのに、「醜態をさらし、いたずらに恥をかくだけだ」と思つたのです。そこで近衛は、「瀬踏みするため、広田にまず行つてもらつたらどうか」と言い出しました。しかし風見が広田に相談すると、「まあ、そういうことをやつてみてもどうかね」。一言云つたきり、黙つて風見の顔を見つめるだけです。これで相談無用とわかつて、風見が陸軍の統制力のなさに話を変えようと、「それだよ、問題は」と、これにはすぐ乗つてきたそうです。

風見は「うっかり腰を上げられない」と云う気持ちでいるうちに、最初の熱も冷めてしまった。石原からは何度か「どうなつた」と催促してきたが、陸軍の統制力のなさを云うのも嫌味だと思つて、「南京行きは当分見合わせる」とだけ通告したと云つてゐます。どうだつたのでしよう。近衛は、そんな陸軍のことを気にするよりも、「これこそ政治家が解決する問題だ」と、全身全霊を以て当たるべきだったのです。そして陸軍が拡大が不拡大かで割れている時こそ、政治家としてのリーダーシップを発揮するチャンスでした。蒋介石の「最後の関頭演説」にして

も、「鍵は日本にある」と、日本の歩み寄りを期待していたので、近衛、広田、そして風見に、「まずぶつかって見る」。この勇気がなかったのは何とも残念なことでした。しかしそれも、この盧溝橋事件がまさか日本の運命を決する大問題になろうとは、思ってもいかなかった。中国問題の認識不足からくるものだったのでしよう。

この間、現地の情勢はますます険悪なものになり、石原が「もう内地師団を動員するほかない。延ばすのは一切の破滅だ」とサジを投げたのは、七月二十六日のことでした。前日の二十五日に北京・天津間の郎坊と云う所で軍用電線が切断され、修理に派遣された日本軍に対して第二十九軍が猛烈な攻撃を加えてきたのです。二十六日には北京城広安門で入城中の日本軍が、城壁から乱射される事件も起きました。二十七日の緊急閣議で、見合わせていた内地三個師団の動員を決定、二十八日から北京・天津地区で全面攻撃を開始したのです。

そして国民の「暴支膺懲」を一層高ぶらせることになったのが、二十九日の通州事件でした。通州は親日的な冀東政権のある町ですが、日本軍の飛行機が誤って保安隊を爆撃してしまつたのです。日本軍から攻撃されたと思つた保安隊が、日本軍守備隊と居留民を襲撃、二百人以上が惨殺される惨事になりました。八月九日には上海で、海軍陸戦隊の大山勇夫中尉ら二人が中国保安隊に射殺され、これをきっかけに戦火は上海にも飛び火しました。海軍航空隊の渡洋爆撃も始まり、政府は九月二日、北支事変を「支那事変」と改めることに決定、ついに全面戦争に突入することになったのです。

きょうは盧溝橋事件発生から三週間を中心にお話してきましたが、ちよつとした行き違いが次々と重なつたことが、よくおわかり頂けたと思います。その行き違いを修正すべきだつたのが、まさに近衛首相であり、広田外相だつたのです。そして支那事変が泥沼化する最大の原因は、当時の日本全体にあつた中国に対する優越感、大国意識だつたのではないでしょうか。拡大派にしても、決して全面戦争を望んでいたわけではありません。「二、三個師団送つて、ガーンと一撃食らわせる。そうすれば蒋介石はすぐ頭を下げるだろう」。この独り善がりの樂觀論が、軍人だけでなく、近衛や広田にもあつたし、国民全体にあつたことが、一番大きな原因だつたように思います。